

教師のためのセミナー

気づきを深める

— ヒューマニスティック・エデュケーションへの接近 —

山口 真人 (南山短期大学助教授)

1. はじめに

たとえば教室で「人間はいかに生きるべきか」という問題を教えるとき、一般の教育に対する考え方からすると先人の優れた思想や生き方を知識として学ぶことで事足りるとされてしまうことが多い。しかし本来この問題は「自分は今どのように生きており、それをどの様に感じ、これからどのように生きていたいと思うか」を学習者自身が明確化し洞察を深めていくための問いかけであったはずである。ところがせっかちになった現代の多くの教室では、この問題を「どのように生きるべきか」の概念の獲得という作業にすり替えてしまい、学習者本人の内部に概念化を求めるより他人の概念化の成果を利用することを中心に進められてしまう。概念化の結果だけを学習の成果として扱う教育観の下では、学習者が自らの手で自分自身の生き方を検討するという“悠長に見える、しかし本質的な”体験過程は省略されてしまい、まさに「学習の自己疎外」とでも呼べるような状況が出現するのである。この学習の自己疎外の克服のために学習の中へ体験過程〔プロセス〕を導入することは教育の人間化への一つの道であろう。

人間関係科での体験学習をベースにしてヒューマニスティック・エデュケーションの研究をするために、私は1982年から約2年間、カリフォルニア大学サンタバーバラ校教育学大学院のジョージ・ブラウン教授のもとで「合流教育」を学んだ。それはゲシュタルトセラピーの原理と方法とを使って学習の認知的側面と情意的側面とを統合する教育の人間化の試みなのである。

2. 合流教育

2-1. 合流教育の発生

1930年代にアブラハム・マズローによって第三の心理学「人間性心理学」が提唱されてから、精神分析学にみられたような人間の病的な側面や行動主義心理学にみられるような生物的行動や生理的な側面からの理解ではなくて、人間特有の能力の成長や自己実現などの側面からの人間理解にも研究の関心が寄せられるようになった。

1962年に設立されたエスリン研究所は人間性に関心を寄せる多くの研究者を集め、そこで開催されるワークショップに端を発して人間の潜在能力開発運動（ヒューマンポテンシャル・ムーブメント）が全世界に広がって行った。特に人間の感情生活と全人的健康に焦点を当てた実存セラピーやボディワークなどによる潜在能力の開発が特徴となった。

1967年にこのエスリン研究所において、フォード財団の助成を受けたカリフォルニア大学のジョージ・ブラウン教授グループの「学習過程における情意と認知の両面を統合するカリキュラムとその教育方法」の研究がゲシュタルトセラピーの創始者フレデリック・パールズの協力のもとに始められ、情動面に働きかける教育技法の開発と教師の養成の試みが始まり「合流教育」と名付けられた。その後カリフォルニア大学サンタバーバラ校に合流教育のための修士・博士課程を備えた大学院が設置された。

1960年代後半から70年代にかけてはさまざまなレベルの学校において人間性の開発をカリキュラムに組み込んだ人間性教育が試みられたが、人間性教育の情動面を重視するあまり教育の認知的側面を否定する傾向を示した先進的な実験校の多くはその偏りゆえに次第に消え去っているが、その中で着実に発展している「合流教育」の重要性はますます高まっている。その理由は合流教育が通常のカリキュラムの中で認知面と情動面とを合流させることを主張していることと、その技法が単なるテクニックではなく実存主義的人間観と成長観に基づくものであり、教師の生き方と不可分なものとしてのベースを持っているからである。

2-2. ゲシュタルト・セラピー

ゲシュタルト・セラピーは、伝統的な精神分析への反省として、フレデリック・パールズが発展させたものであるが、その哲学的な基礎を実存主義的現象学におき、方法論的には“いまここ”で体験していることへの意識性を高め、人格の中で対立したり固着しているさまざまな自我の構成要素間の図-地関係を流動化させることによって吟味しながら主体としての統合性を高め、他者や環境への受動的依存関係を主体的な相互関係（自立）へと変革するように働き

かけるものである。

ゲシュタルト・セラピーでは、人間の成長についてのすべての手がかりは“いまここ”での行動の中にすべて存在すると考える。それゆえに、人は自分の成長や発展をさまたげている情緒的な葛藤や障害の存在に気づき、行動や体験を受け入れたり誇張したり探索することによってそれを突破していくことができるようになる。治療のためにはいろいろな種類の技法が用いられるが、意識性の開発と身体言語を重視し、行為の理由の探求には力点を置かずむしろ自分自身の“いま”と充分接触することに力点を置き、人が情緒的な経験を統制したり、あるいは幻想や理性で正当化したり、身体的に抑圧したり、他者へ投影したりすることで回避したりしようとすることなく、あるがままに自分自身を体験することができるようにする。

別の言い方をすると、人間を有機体としての生命エネルギーの流れとして考えた場合、そのエネルギーの流れを押し止めたり、別の形で浪費させてしまうブロックを発見し、突破し、再びその流れを自由にできるように援助するものである。

3. セミナーの概要

3-1. ねらい

未来を担う子供達の現在の教育状況はますます競争的になりますますます知育偏重になってきている。そんな中で教育の人間化に取り組んでいる教師や取り組みたいと思っている教師も多いはずである。

セミナーでは、現職で教育に携わっている教師が、日常の教育活動の中で体験していることや感じていることを素材にして自分の教育観を点検し、生徒という存在や自分と生徒との関係や自分自身の状態により深く気づく能力を養い、人間尊重の教育活動を展開できる自分の生き方を基礎づけることをねらいとした。

ねらいの主要部分は教師自身の自己成長であり、具体的な授業案の作成は付帯的なものであった。

3-2. 実 際

セミナーには2つの柱を設けた。一つは、参加者が各自の授業の中で体験したことを話し合う知的なプログラムと、他の一つは、ゲシュタルト・アプローチによる気づきを深め自己の統合をはかる体験的なプログラムである。

毎回のセミナーの日程はおおよそ二つの部分からなっている。前半は参加者がお互いの状況報告をかねておもに自分の教室の中で体験したこと、試みたこと、感じ考えた事などを語る。これは幼稚園から小・中・高・大とレベルの違う学校現場での教育状況を聴き、お互いの反応やコメントを通して人間中心の

教育のあり方を考え、人間中心の教育の実践に関する知的情報交換を行う。後半は誘導イメージによるファンタジーやゲシュタルトアプローチによる気づきを深めるための実習やワークをおこない、自分の行っている投影（プロジェクション）や取り込み（イントロジェクション）、反転投射（リトロフレクション）などに気づき、教師としてまた一人の人間としての自己の内で矛盾したり分裂したりしている自我の統合をこころみる。

これらを基本要素として12回（約3カ月間）を一区切りとした。これまでの参加者の所属を一覧表にして示した。

参加者の所属	開催回					計
	1	2	3	4	5	
幼稚園	0	2	1	1	0	4
小学校	4	1	1	2	0	8
中学校	3	1	1	4	1	10
高等学校	4	1	2	1	3	11
その他	1	0	2	0	0	3
計	12	5	7	8	4	36

第一回以外は参加者が定員を満たさなかった事は残念であったがしかし、逆に深く親密なセミナーが実施できた利点もあった。その中でも第5回は参加者が特定の学校に偏ったため参加者にとって刺激の少ないセミナーになってしまった点を反省している。開催曜日の問題もあったかも知れない。いずれにしても授業以外にも学校行事やクラブ活動など生徒指導に忙しい教師にとって三カ月間毎週学校が終わった後にセミナーに通うことは大変な事であつたらうと想像すると、参加して下さった先生方には本当に頭が下がる思いで一杯である。

3-4. 参加者の感想

日々学校の中でそして教室で生徒の前に立ち彼らのまなざしにさらされている教師という職業は、人間であるがゆえに不完全であり弱さを持った存在として生きている教師自身にとって常に悩みをもたらすものであろう。生徒に語る価値や生き方と自分自身にとっての価値や生き方とのズレや不一致に気づくとき人間としての教師の悩みは倍加する。しかしその気づきなくしては真の成長もありえないともいえる。一人のセミナー参加者からの手紙を通して、人間として生きようとする教師の姿を見てみたい。

『この研修に参加するにあたり、私は自分にできるだけ素直になろうと試みました。そしてそこから生じたことは、教師である私との闘いでした。

今、もう一度このセミナーのねらいを読みなおし、私がしてきたことは「自分自身に対する気づきを深めること」にとどまっていたことを感じるのですが、それほどそうしなければならないほどに、自分が教師であることに疲れていたことに気づきました。

私自身と私の教師である部分とはギャップがあり、その中で身動きできないでいる私は、それから逃げたい思っていたのだと感じます。頂いたG. I. ブラウンの「よみがえった授業」の序論の中に『「死んだ教室では」 彼は「生徒としての私」とでも呼ぶべき自己の役柄ないし自己像をつくりあげるのが、それは本当の自分とはほとんど関係ないものである。』というところがあります。 「生徒」を「教師」という言葉でおきかえた時、何か私の心に傷みを覚えるのです。

なぜこんなに“教師”である私にこだわるのか、今の私には何か見えない仕事の圧力と、わけのわからない制約みたいなものに縛られているように感じていました。しかしある時から縛られているのではなく縛っている自分に気づかされ、それと同時に私の為の教師像に“はっ”とさせられたのです。

「バラの花」のファンタジーは、たぶん私の最も重要な問題であり、恐れていたことを私の口を通して表現しました。それ以来、私はこのセミナーへ来ることに緊張し、帰ってからも私の頭の中は混乱していました。「自分の今に気づく」「今、私は何をしたいのか」をバラの花のイメージの中で感じた時、私が精一杯おさえていたことが心の中で爆発するのに気づきました。それは私への挑戦でした。

プリントでE. H. マーカスの「ゲシュタルト・セラピー入門」を読み、「今・ここ」にこだわり、「～したい」ことと「～すべき」ことにもこだわり、「～できない」ことと「～したくない」ことにこだわってみても、私からは「なぜ～なぜなら」は抜けきらないのです。『「なぜ」という問いに対しては自己正当化が始まりやすい。限りもなく説明は考えつくが、人間としての「気づき」や成長は生起しない』とあるにもかかわらず私はここから動くことができないでいました。

未成熟な私を思い知らされ、気づきながら、11月6日はさらに私にショックなことがありました。初回から私はこのセミナーを準備される先生に尊敬を越えて驚異を感じていたことがありました。それは、受講生にいろいろと気を使ってくださるのが私には気になっていたのですが、私たちが最後にまとめを書き始めると、先生は受講生のお茶碗を集められかたづけして下さいましたが、私はそれをとても痛い思いで背中で感じておりました。“そんなことがあるだろうか！”お盆に乗せたお茶碗を運ばれる先生の後ろ姿に“感動した”などと表現しては失礼でしょうか。そしていつだったか私が急いで立ってかたづけ始めたとき、「ここでは皆さんが主役ですから」と先生がおっしゃった言葉に「私はこれでも教師なのか」と思い知らされました。その時私

は教師であることの出発点に振り戻された思いでした。

私はここ数年子供の姿を観ようと試みました。それは私自身のためであり、私のささやかな勉強のためでした。ですから私が教壇に立った時彼女達（生徒達）が元気で生き生きしていれば私は満足でした。それは私にとっての満足であり、生徒達のそれではなかったように思うのです。ミシェル・クオストの祈りのように「兄弟である人々の真の要求に応えるため」に私が生きてきたかと問われれば、私は何も答えがないのです。どうしたらそのようなになれるのかと思うのです。人間が好きだからですか。私はいま教師の出発点に戻り「人々の真の要求に応える」気があるのかどうかを私自身に問いなおしています。

1月27日のエンプティチェアーの経験は、あの場において下さった方々にとっても感謝しているのですが、正直なところ今思い出すと恥ずかしいのです。しかしあの体験で私は出会い、気づき、そして今何か私の中で変化しようとしている自分を感じています。

このセミナーを終えた今、他者の気づきを深めたり、教育現場で生かせることができるようになったとはとても思えないのですが、今はただそうしたい、そうなりたいと思うのです。昨夜友人と話していてふと気づいたのですが、私自身教師を意識しないでいる時の方が、生徒により近いところで、生徒の真実に近い姿に触れているような気がするのです。しかし今の私にはまだ教師の衣を脱いだ自分に自身はありませんけど、そうなれたらいいなあと思うところで

最後に、今年のクリスマスがとても楽しく迎えることができた大きな理由の一つが、この人間関係科のセミナーに参加できたことにあることをお伝えしなければなりません。そしてひょっとしていつか、私が教師をやめるときがきても、ここでの体験や経験は、私の中に生きています。』

参加者へのセミナーの影響の程度はさまざまであろう。最後に研修終了後無記名で実施しているアンケートへの回答をまとめておく。

○今までいかに生徒に対して指示や解釈のことばかけが多かったかと反省した。例えば描画テストで生徒を理解したと思い込んで自己満足していたが、描いた絵の中のもの（あるいは人）になって生徒に語ってもらった時、今までこちらが勝手に解釈していた時よりも実に生徒自身の声が聴けた。

○ゲシュタルト理論が深い人間尊重の立場に立っていることを知って心強い理論を知ったように思う。小生は臨済宗の小寺院に身を置く一人ですが、今回のセラピーの一つ一つが参禅者と老師との関係に類似しているのを発見したのは大きな収穫でした。

○・教師である私自身の意識に変革がおき、子供の見方が変わった。

・「気づき」を心がけて生活するようになった。

- ・人と接する時、話す人の言葉だけでなく全体をとらえるように心がけるようになった。
- ・参加しているメンバー（先生たち）のお話に共鳴したり、自分のところでも生かせる内容が沢山あった。

○生徒とのコミュニケーションがうまくいかず悩んでいました。以前は、生徒なら教師の言う事をきくのはあたりまえとか、態度の悪い子に対し、非常に敵対心をもって接していたようです。しかしセミナーを受けていくうちに、自分の心のあり方が間違っていたと思いました。子供達の表面的な部分だけを見て判断するのではなく、一人一人の子供の心の部分をよく観察して少しでも理解する事が必要だということと、教師の立場からだけでなく、生徒の立場になって物事を考えたり見たりすることもこれからの私に対する課題だと思います。

○私は教師の精神と技術とを分離して考えていたのですが、ゲシュタルトにおいて、精神と技術が融合しているのを見ました。これは私にとって非常に意味のある発見であったと思います。ただ、現実での教室とどのように関連させていくかが問題です。それが私の課題でしょう。勉強します。

- 自分の感受性訓練という点においては良かった。
 - ・学習場面での具体的な実践が十分にできずもったいなかった。
 - ・これまでの子供へのかかわり方を見直すことができたと同時に、少しではあるが子供へのかかわり方に変化が見られたと思います。
- 自・他共に今まで以上に気づくようになりました。
 - ・個々の人間はそれぞれに異なっていることに気づき、生徒を集団として観察する度合が少なくなりました。
 - ・授業に活用しました。

○「教える」ということは技術より心を育てることだと思う。そのためにはどんなふうにも子どもにかかわっていったらいいのかということを見せてもらったように思うが、今までの自分がやってこなかったようなことばかりなので自分自身に非常に迷いがある。この研修を通して子どもへのかかわり方を学より、自分自身のあり方、これからの方向性のようなものを考えさせられた。

○より自分について“したくないこと”“したいこと”が明確化された。よって余分なカラがとれた様に感ずる。また生徒に対してもアドバイスとして有効である（～しなければならぬ→～したい、など）。成熟度についてはまだまだの感があるが。

○クラスの中での活用はほとんどしなかったが、個々の生徒との関わりの中では Bell Words 等を使ってみたり、personal response は試みた（例、抽象的→具体的、やってみる→何を、質問→statement）。また自分自身の言動も but→and とか、できない→したくない等意識してみた。自分の中の混沌が少し整理されてきたように思える。

○私自身登校拒否寸前の状態の時にこのセミナーに参加した。一つの出来事に

もいろんな見方をしよう、むしろ長所を見つけようという努力を心がけるようになった。どうしたら向上するようになるかを気長に構えることにした。「気づき」の遅い私なのだが、もうしばらくこの職で頑張っていきたい。

○他者を介さず、先入観を持たず、どこでも接する生徒に自由に話しかけ、話を聴くことが多くなった。何でもきっかけにしてやろうということが多くなったようです。楽しかったことが最大の収穫です。

○一週間という期間を区切ってふりかえることによって、どのように生きるかということをつかむことができた。続けたい習慣のように思う。また現実を受け入れること、気づきのあること、そのことの雰囲気が決して暗いものでもなくまた悲しくつらいことでもなく、希望やユーモアに満ちていることでもあることを知りました。

